



フロンティア、それは開拓された場所と未開拓の場所のはざま。転じて、学問・技術などの最先端を意味する言葉として使われています。

私たちが住む鹿児島にも、新しい事に挑戦している人、最先端を走っている人がたくさんいます。

かごしまフロンティアでは、そんな人たち、そしてその取り組みをご紹介します。鹿児島島の最先端を一緒にのぞいてみましょう。



1分1秒でも早く患者さんのもとへ ドクターヘリ・フライトドクター

鹿児島市立病院 救命救急センター部長 吉原 秀明 さん(49歳)

昭和62年、鹿児島大学医学部を卒業。東京や名古屋、大阪の大学病院に勤務後、平成13年よりアメリカの大学病院へ3年間留学。帰国後、大阪府立急性期総合医療センター・救命救急センター副部長を経て、平成19年1月より鹿児島市立病院救命救急センター科長に就任。現在、同センター部長を務める。

国内唯一の機体での 運航開始から1年

平成23年12月26日、鹿児島県でドクターヘリの運航が始まった。ドクターヘリは、医療機器や医薬品を搭載した救急医療専用のヘリコプターで、専門の医師と看護師が搭乗して救急現場などに急行し、現地で患者の治療を開始するとともに、いち早く医療機関へ搬送するもの。その運航主体となっているのが、鹿児島市立病院だ。市立病院では、救命救急センターに所属する5人のフライトドクターと7人のフライトナースがドクターヘリの出動に備えている。

本県が導入したドクターヘリは、国内では唯一、横ドアからの患者搬入ができるサイドローディングの機体だ。また、最高速度は時速311km、実運用速度は時速278kmと救急ヘリの中でも最速のフライト能力を持つ。県本土はもちろん、熊毛地域など半径210kmを圏内とする運航範囲を持つ。



ヘリ機内。患者は奥の横ドアから搬入する

つ本県に適した頼もしいヘリだ。

鹿児島だからその独自性 「キーワード方式」の効果

本県では、ドクターヘリを要請する際に「キーワード方式」を採用している。キーワード方式とは、119番通報の内容に「倒れている」、「閉じ込められている」などのキーワードとして、あらかじめ登録されている言葉が一つでも含まれていたときに、機械的にドクターヘリの出動を要請するシステムだ。

国内でドクターヘリを運航している団体では、119番通報からヘリへの要請までに平均して13分程度かかっている。これは、119番通報を受けて救急隊が現場に駆けつけ、それからドクターヘリが必要かを判断し、要請するためにかかっている時間だ。鹿児島では、キーワード方式の導入により、ヘリの要請までにかかる時間は平均して8.3分（平成23年度実績）。全国平均を大幅に上回る速さだ。

本県は運航主体である市立病院とヘリポートが約3.5km離れている。これは一般的には不利な条件だ。しかし、そこを逆手にとった。ヘリの要請があると、フライトドクター・ナースは市立病院から浜町ヘリポートへ、ラピッドカー（救急車両）で移動する。「ドクターヘリの要請を行う消防隊には、私たちがヘリポートに到着するまでの間に考え直したら、キャンセルしてもかまわないと言っています。ドクターヘリを必要としている重篤な患者さんが多く、少しでも早く到着することが大切なのです」。119番通報から現場到着までの速さは全国で3番目。ヘリポートまでの移動時間のロスもヘリの高速飛行でカバーできている。



手前のラピッドカーでヘリポートへ移動

平成27年度に市立病院は上荒田町に移転を予定しており、その時にはヘリポートを備えた病院になる。それまでに検証を重ね、キーワード方式の精度を高めることで、現場到着までの時間の短縮化が期待される。

鹿児島島の医療の 一層の充実・強化のために

ドクターヘリの運航に伴い、期待できる効果は救命率の向上だけではなく、吉原医師は地域医療への支援を

挙げる。「防災ヘリだと、現地の医師が同乗しなければならぬ。その結果、無医村状態になる地域もあった。ドクターヘリなら、現地の医師はその場に残ることができる。他の症例に備えることができる」。

また、ドクターヘリで搬送した症例のうち、市立病院への搬送は52%。残りは県内各地に指定された34の医療機関に搬送している。症例を市立病院だけに集中させるのではなく、地域の中核病院にも分散させることで、地域の病院がしっかりと役割を担うことになる。地域の病院も、症例が増えることで、資機材や医師を配置する価値が生まれ、県全体の医療レベルの向上も期待できる。夜間、ドクターヘリは飛べない。その間、地域の安心を守るのはそれぞれの地域にある病院だ。

「これから鹿児島島の医療のために」。ドクターヘリの果たす役割は限りなく大きい。



フライトスタッフの皆さん